

第 1676 回（5 月 7 日）

住民意識の変容

— 1985 年と 1995 年 —

石 原 豊 美

滋賀県愛東町で実施した住民意識調査の結果を報告した。調査は同町の 2 つの集落で、18 歳以上の全住民を対象とし、1985 年 1 月と 1995 年 8 月に、質問紙を用いて自形式留置法により実施した。（以下、2 回の調査をそれぞれ第 1 回調査、第 2 回調査あるいは'85 年調査、'95 年調査と略す。）

第 1 回調査は、有効回答率が 79.3 % で 551 の有効回答が得られた。第 2 回調査の有効回答率は 69.5 %、有効回答数 511 である。2 回の調査間で調査対象者の基本的特性に大きな変化はない。

住民意識の変容について検討するにあたり、第 1 回調査の質問項目より抜粋した 23 項目、第 2 回調査については集落への愛着に関する新たな質問項目を含む 24 項目を検討の対象とした。

第 1 回調査と第 2 回調査の間に「隣近所との付き合いは煩わしい」「集落や村内の行事に参加したくない」および「社会福祉の施設は自分の住む集落の近くに作ってほしくない」の 3 項目の支持率が増加した。また、「子供が一人もいない家では家系が絶えないように養子をとるのがよい」の 2 項目の支持率が減少している。他にも、（地域）社会へのコミットメントや貢献志向、伝統的な価値志向などが低下傾向を示していることから、2 回の調査が実施された約 10 年の間の住民意識の変化を、伝統的意識の後退と個人化の進行として要約する。

因子分析の結果、第 1 回調査と第 2 回調査の間で、第 1 因子が伝統的な価値への同調性と社会的な貢献への志向性を示すものである点是不変であった。ただし、第 2 回調査については、検討した質問項目の中で「隣近所と

の付き合いは煩わしい」および「集落や村内の行事にはなるべく参加したくない」の因子負荷量が正になっている。第 2 因子以下をみると、第 1 回調査については、第 2 因子＝社会的活動重視志向、第 3 因子＝（没个性的・）現状肯定的志向、第 4 因子＝現状肯定的（・活動的）志向、第 5 因子＝私的価値重視志向である。第 2 回調査については、第 2 因子＝（个性的）活動重視志向、第 3 因子＝物質的価値重視志向、第 4 因子＝社会的貢献志向、第 5 因子＝現状肯定的・私的価値擁護志向である。

因子分析の結果と先に指摘した伝統的な意識の後退（および個人化の進行）という意識の動態は、直接的には結び付かないけれども、①'85 年調査、'95 年調査とも伝統的な価値を重視する地域の基本的な特徴を第 1 因子が示しており、②'95 年調査で社会的貢献志向が第 4 因子に退き、（个性的）活動重視志向が第 2 因子となっている点が着目される。

文献の中で、「[家]と[村]の中に埋没して人間的自我の充足が抑圧されていた意識形態」（福武直「戦後における農民意識の変容」『福武直著作集 第七巻』東大出版会、1976 年、247 頁）が戦前的な農民意識の原型とされている。また、「慣習の優位」や「権威への服従」も特徴として指摘されている。こうした伝統的意識からの脱却が、農地改革と兼業化を契機としてどのようになされたかについての記述もなされている。（福武直「家族生活の構造」および「農村の文化と農民の社会的性格」『前掲書』、1976 年。）

なお、最近の日本人の価値意識について私生活主義と余暇生活の重視が特徴として指摘されている。（有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化」『法学研究』第 67 巻第 12 号、1994 年。）愛東町で実施した住民意識調査について、こうした研究の示唆するところに照らしてさらに分析を進める必要がある。